

北斎の父

——御鏡師・中嶋伊勢の系譜——

はじめに

岸 文 和

葛飾北斎（宝暦一〇年「一七六〇」～嘉永二年「一八四九」）の出自については、いくつかの説がある。北斎研究の基礎文献とも言うべき飯島虚心の『葛飾北斎伝』（明治二六年「一八九三」）は、江戸時代の『浮世絵類考』三馬書入れ（文化四年「一八〇七」）や、岩本活東子『戯作六家撰』（安政三年「一八五六」序）と同じように、北斎を幕府御用達町人である御鏡師・中嶋伊勢の「男」とする⁽¹⁾。一方、北斎を中嶋伊勢の養子とする研究者も多いが、その出自については二つの説に分かたれる。ひとつは、北斎の後妻（川村氏）の一族である多知女の「遺書」に基づいて、北斎の出自を川村氏とする説である⁽²⁾。もうひとつは、馬琴が北斎からの手紙に貼り付けた紙に「壮年その叔父御鏡師中嶋伊勢が養子になりしが、鏡造りのわざをせず、その子をもつて職を嗣せしが、そハ先だちて身まかれり」と朱書していることを根拠に、北斎の実父を中嶋伊勢の兄とし、二十七～九才の頃に、叔父・中嶋伊勢の養子となったとする立場である⁽³⁾。

本論の課題は、このような研究状況を踏まえて、北斎の「父」とも「養父」とも「叔父」とも言われる御鏡師・中嶋

伊勢とはどのような人物であったのかを、可能な限り、残された文献資料に即して明らかにすることである。中嶋伊勢については、すでに安田剛蔵の論が備わっているが、その後、御絵師を含む御用達町人の研究が進展するなかで、参照すべき史料の存在も明らかになっている⁽⁴⁾。以下、『鏡師名寄』、武鑑、および『御規式書留』などの旧幕引継資料や、『守随家文書』などを取り上げ、北斎の実父／養父／叔父と言われる御鏡師・中嶋伊勢は元文四年「一七三九」に三代目となって以来、六〇数年間御用を勤め、享和三年「一八〇三」、北斎の実子（長男）・富之助に四代目を相続させたこと、および、北斎自身が御鏡師を相続したことはないことを明らかにする。

第一章 鏡師——『鏡師名寄』と「名所案内記」を手がかりに

中嶋伊勢は「御鏡師」と呼ばれるが、この呼称は、幕府の御用を勤める鏡師にのみ与えられる。一方、「鏡師」そのものは、「仏神の御正体」であり日用の道具でもある鏡を製作する職人として、近世になって増加した⁽⁵⁾。この鏡師については、江戸神田大和町住研屋定吉が鏡の銘記のみを彙集した『鏡銘寄集』が、香取秀真によって発見されて以来、広瀬都巽などによって「漏れたものを補い、また記録・遺品などによりおよその年代を窺知できたものは注記」されて、徐々に詳細が判明しつつある⁽⁶⁾。中野正樹『和鏡』に掲載された『鏡師名寄』には六一〇数件の鏡師銘が見えるが、中嶋伊勢関係のものは次のようである⁽⁷⁾。なお、「同一鏡師と思われるものも、異なった鏡師銘をもつ場合は別に記載した」とある⁽⁸⁾。

天下一中嶋伊勢守

中嶋伊勢守藤原定重

天下一中嶋定利

前期

天下一中嶋伊勢守藤原種定（寛永一二年／一四年）江戸

これら四件の鏡師銘は、三人以上の「中嶋伊勢守」のもので、「定」という一字を継承しているところから、親子関係を含む師承関係にあるものと思われる。その関係については定かではないが、「天下一」という称号と、「伊勢守」という受領名（国名名乗）の組み合わせによって、およその見当を付けると、次のようになる。まず、「天下一」という称号は、信長が京都の諸職人町の商工業活動を活発にするために公許制度として設けたものであるが、次第に勝手／自分名乗りされるものとなって、夥しい天下一を生む結果となった。この風潮は、秀吉・家康の時代にも続き、江戸幕府の成立後は、京都の商工業者の江戸移住とともに江戸に広がることとなり、過熱化していった⁽⁹⁾。そこで、天和二年「二六八二」七月、幕府は天下一の称号を使用することを禁止した。一方、商工業者は、天下一の誇称を使用することと並行して、さらに、天下一の内部で差別化を図るために、受領名を名乗ることも行っていた。文明年中から元禄年中に至る諸芸の受領年月日、俗称、住所を記した『諸職受領調』によると、職人受領の初見は、文明一三年「二四八一」に大工越後の先祖が加賀守を受領した口宣案で、「鏡屋」の初見は、天正一八年「一五九〇」に「東洞院通松原下ル桜町鏡屋越後祖父」が受領したものである⁽¹⁰⁾。したがって、天下一が使用禁止になった後は、受領名が「階層内における社会的プレステイジを高める手段」としては唯一のものとなり、三名の中嶋伊勢の關係について敢えて言えば、「天下一中嶋伊勢守藤原種定」と「中嶋伊勢守藤原定重」は直系親族で、「天下一中嶋定利」は「天下一中嶋伊勢守藤原種定」と同じ時期に活躍した傍系である可能性が高いように思われる。ちなみに、「天下一中嶋伊勢守藤原種定」は、江戸住とされている上に、寛永一一年「一六三四」と同一四年「一六三七」の年紀のある鏡が残されていることから、寛永一六年「一六三九」、三代將軍家光の娘千代姫が尾張家二代光友に嫁ぐ際に持参した調度である「初音の調度」中の《蓬

葉文柄付白銅鏡・銘・天下一中嶋伊勢守》(徳川美術館)の製作者に比定することが可能かもしれない。

鏡師はいわゆる「名所案内記」や「買物案内記」といったガイドブックにも掲載されている。従来から知られている史料であるが、念のために、確認しておくことにする。まず、藤田理兵衛著・菱川師宣画『江戸惣鹿子名所大全』第六卷(元禄三年「一六九〇」刊)の「諸職名匠諸商人」の部に「鏡師」として掲載されている人たちである。

神田乗物町 中嶋伊勢守

尾張町一丁目 中嶋伊勢守

南鍋町 山本加賀守

尾張町一丁目横 山隆近江守

天和二年「一六八二」に天下一の称号を使用することが禁止されているから、すべて受領名を名乗っているが、中嶋伊勢守が二件、記載されていることはいささか不審である。別人である可能性もまったくないわけではないが、同一人物が二ヶ所、屋敷を所有していたと考えることが自然である。また、『万買物調方記』(元禄五年「一六九二」刊)には、「江戸ニテ鏡師」として、前記四名が下司(守)なしに掲載されている⁽¹⁾。また、『日本国花万葉記』(元禄一〇年「一六九七」刊)には、「御鏡屋」として、すなわち幕府御用達町人として「中嶋伊勢 神田乗物丁」だけが掲載されている。それに対して、『江戸買物独案内』(文政七年「一八二四」刊)には、「京橋銀座四丁目／御用所鏡師／御鏡所／跡部肥前掾藤原春信／鴻池屋平蔵」一名のみが記載されて、中嶋伊勢の名前はない。中嶋伊勢は、若年寄支配の御細工所に所属する御用達職人であって、寛文六年「一六六六」の「細工所制規」には「御城外御用之儀、一切可為無用事」と定められていて、幕府御用以外に細工物を作るとは禁じられているから、ショッピング・ガイドである『江戸

買物独案内』に掲載されないのは、至極自然なことである⁽¹²⁾。

第二章 御用達——「武鑑」を手がかりに

中嶋伊勢は、市井の鏡師ではなく、御鏡師という御用達町人であった。狩野派の画家たちが単なる絵師ではなく、一種の職分として「御絵師」と呼ばれたようにである⁽¹³⁾。彼らは諸般の御用を調達するよう指定された特権的な商人や職人で、本来町人身分であったが、幕府から、知行地、扶持、拝領屋敷などを与えられ、士分とみなされて町方の人別には入らず、武家名簿である「武鑑」に記載された⁽¹⁴⁾。「武鑑」では、延宝元年「二六七三」の『江戸鑑』（和泉屋版）から「御用達町人」の名前が掲載され始め、一七世紀を通じて、種類・人数を増加させ、江戸時代中頃ともなると、四五〇名程の名前が見えることとなった。左の表は、「武鑑」に「御鏡師」あるいは「御鏡屋」として登録された中嶋伊勢と、もう一人の御鏡師である村田山城の記事を、須原屋版と出雲寺版において追跡したものである⁽¹⁵⁾。

須原屋版と出雲寺版の記事は必ずしも一致しないことから、両者が中嶋伊勢と村田山城の現実の動静を必ずしも正確に反映しているようには思われない。しかし、これらの記事を総合的に判断すると、次の三つのことは蓋然性が高いように思われる。第一に、中嶋伊勢は、遅くとも貞享元年「一六八四」までには、神田乗物町に屋敷を構え、御用達に取り立てられた。第二に、遅くとも宝暦一〇年「二七六〇」までには、御目見を許され、本所松坂町に御屋敷を拝領した。第三に、本所松坂町に御屋敷を拝領して、例えば仕事場／貸家として利用しながら、実際は、他のところに住居を構えていた可能性がある。これらの点については、後に詳論するが、前二者については、第一章で確認した「名所案内」に記載された情報とは矛盾しないことは確かである。

年代	須原屋版（宝暦一〇年以後）		出雲寺版『大成武鑑』		備考
貞享元年 〔二六八四〕	かんた のりもの丁	中嶋伊勢			『顕正景江戸鑑』（版元不明）
宝暦一〇年 〔二七六〇〕	同右		本所松坂 丁一丁目 △●中嶋伊勢	むろ丁 二丁目 村田山城	●は御目見 △は御拝領地
宝暦一二年 〔二七六二〕	本所松坂丁 一丁目 □中嶋伊勢	むろ丁 三丁目 村田山城	同右	同右	□は御細工所御用
文化一三年 〔二七六二〕	本所松坂丁 一丁目 中嶋伊勢	同右	？	？	寛政七年以後、文政一 二年までの『大成武鑑』は未見
文政一一年 〔二八二八〕	同右	大てんま 二丁目 村田山城	？	？	
文政一三年 〔二八三〇〕	同右	同右	下谷三ノ 輪丁 △●中嶋伊勢	大てんま 一丁目 村田山城	
天保九年 〔二八三八〕	同右	同右	深川猿江 △●中嶋又左衛門	同右	
慶応四年 〔二八六八〕	同右	同右	同右	同右	

第三章 御目見——『御規式書留』を手がかりに

御用達には、さまざまな特権が与えられたが、御目見もそのひとつである。江戸城内では、年始（正月元旦／二日）・五節句（七草〔正月七日〕／上巳〔三月三日〕／端午〔五月五日〕／七夕〔七月七日〕／重陽〔九月九日〕）・八朔（八月

朔日）・嘉祥（六月一六日）・玄猪（十月最初の亥の日）・歳暮、そして月次拝礼日に、御三家をはじめとする大名や幕府役人が將軍に拝謁することが行われており、身分によって、どの日の拝礼に参加でき、どの席に座るか——御礼席——が定められていた。国立公文書館所蔵の『御規式書留』は、年始御礼などの式次第、伺い、評議内容、決定事項などを書き留めたもので、享保三年「一七一八」から慶応三年「一八六七」までの一五〇年間のうち、およそ三四年分が保存されている。そのうちの「職人町人御目見願之届」三年分のうちに、中嶋家から出された三通の願、すなわち「年始御目見願」二通と「五節句八朔歳暮御目見願」一通がある¹⁶⁾。

第一は、文化五年「一八〇八」に出されたもので、冒頭に「書面願服部弥三郎三河屋／勘六中島富之助山田吉兵衛／年始／御目見差出可申旨其外者／先難成旨被仰渡奉畏候／十二月廿六日 馬場助左衛門」と記されている。馬場助左衛門が、服部弥三郎・三河屋勘六・中島富之助・山田吉兵衛の四名について、年始御目見を願い出るもので、例えば、服部弥三郎については、「御定之通五ヶ年相立候付願之通／相済可然もの」——跡職相続以来五年が経過したので御目見を許可する——と朱書された後に、御蒔絵師・服部家の家例が記されている。そして、中嶋家についても、「御用相続五ヶ年相立候付／願之通相済可然もの」と朱書された後に、次のように記されている。

年始

御目見願

御鏡師

中島富之助

享和三亥年跡職申渡

初代

常憲院様御代御用被 仰付

御目見

有徳院様御代御用相続

御目見

中嶋家の初代が、「常憲院」すなわち五代將軍・綱吉（在職一六八〇～一七〇九）の時と、「有徳院」すなわち八代將軍・吉宗（在職一七一六～一七四五）の時に、御目見を許されたと記されているが、願の体裁として不完全であるように見える。

第二は、文久二年「一八六二」に出されたもので、「御四代以下 御目見相済候者」候得者家「例も有之候間願之通相済可然もの」——四代以下（内）の將軍に御目見したので許可する——と朱書された後に、家例が詳細に記されている。なお、「」は筆者による補注である。

年始

御目見願

御鏡師

中嶋藤七郎

去申年「万延元年／一八六〇」跡職相続

初代

常憲院様御代延宝九年御用被

仰付

二代

元禄十四年跡職相続

御目見

三代

元文四年跡職相続

年始五節句八朔歳暮

御目見

四代

享和三年跡職相続

同年年始

御目見願済

五代

文化十三年跡職相続

御目見之儀不相見

六代

文政三年跡職相続

同七年年始

御目見願済

七代八代

跡職相続

御目見之儀不相見

父

天保二年跡職相統

同四年年始

御目見願済

第三は、慶応元年「一八六五」、同じく中嶋藤七郎から提出された「五節句八朔歳暮／御目見願」で、第二の例と同様、「御四代以下 御目見之者」候得者年始も相済家例も有之候間願之通相済可然もの」と朱書された後に、家例が記されている。記述内容は、中嶋藤七郎について「万延元年「一八六〇」跡職相統／文久元年「一八六一」年始／御目見願済」とある点と、父の「跡職相統」の年代を天保四年「一八三三」とする点を除くと、同じである。

なお、この『御規式書留』享保七「一七二二」年十二月十三日条には、「年始歳暮 町人献上物品々」として、多くの御用達町人に混じって、御細工頭支配の「中嶋伊勢」が鏡を献上した記録がある。

第四章 御屋敷拝領——「町方書上」「諸屋敷帳」を手がかりに

御用達に与えられたもうひとつの特権が御屋敷拝領である。御用達がすべて御屋敷を拝領していたわけではないが、「武鑑」によって、中嶋伊勢は遅くとも宝暦一〇年「一七六〇」までには、本所松坂町に御屋敷を拝領したことが分かっている。ただし、御屋敷については二つの史料がある。

第一は、文政一一年「一八二八」九月、本所松坂町荳丁目の名主・長兵衛が作成した「町方書上」で、次のような記述がある¹⁷⁾。

東側南之方

御細工頭支配

表間口 京間六間

御鎗研師

裏行 同 式十間

佐柄木弥太郎

此坪数 百式拾坪

同支配

同側北之方

御鏡師

表間口 京間六間

中嶋甚兵衛

裏行 式十間

此坪数 百式拾坪

右式^ケ所拝領町屋敷之儀^者、元禄十六未年十一月吉良上野介殿上り屋敷跡先祖佐柄木弥太郎・中嶋伊勢兩人共同様
拝領仕、当時右弥太郎・甚兵衛所持仕候

この記録によると、中嶋伊勢は、御鎗研師・柄木弥太郎とともに、吉良上野介の屋敷跡をそれぞれ一二〇坪ずつ拝領したが、その時期は元禄一六年「一七〇三」であって、二種類の「武鑑」の記述とは一致しない。

第二は、屋敷改が江戸市中にある大名・幕臣などの武家屋敷を調査し、役職別に編集した台帳「諸屋敷帳」の安政三年「一八五六」度のものと考証されているものである¹⁸⁾。

一 町屋敷 本所松坂町壱丁目 百二十坪 御鏡師 中嶋又左衛門

右は町人共^江貸置当分深川扇橋町家主佐吉支配地住宅

中嶋又左衛門は、拝領屋敷を町人に賃貸し、自分は深川扇橋に居住しているという。安政三年といえ、中嶋伊勢／又左衛門の屋敷は、須原屋版『安政武鑑』では「本所松坂丁一丁目」、出雲寺版『大成武鑑』では「深川猿江」となっていて、これらの記事の間には矛盾があるから、普通に考えれば、少なくともどちらか一方が誤っているように思われる。しかし、実情は、一方の「武鑑」が名目上の御屋敷を、他方の「武鑑」が実質的な住居を記載していたのであって、その意味では、両方とも正しかったと言わべきであろう。このような表／奥屋敷ともいべき事態は、元禄一六年「二七〇三」以後に生じた可能性が高い⁽⁹⁾。元禄三年「一六九〇」に刊行された『江戸惣鹿子名所大全』に、「神田乗物町」の中嶋伊勢と、「尾張町一丁目」の中嶋伊勢が記されていることを考慮すれば、これらのことは鏡製作という仕事の性質（鋳物業の一種）と何らかの関連があるかもしれない。

おわりに

御用達町人のうち、御細工頭支配——細工所所屬——の職人については、いくつかの研究がある⁽²⁰⁾。御秤師・守随氏についての研究である林英夫『秤座』もそのひとつで、文久二年「一八六二」の調査と思われる『御細工所御職人分限帳小札写』を紹介している。この史料には、当時の細工所に所屬する職人のうち、（１）御目見の者（八〇人）、（２）御目見の資格のない者（二五人）、（３）部屋住見習の者（二五人）、計一二六人の名前が記されているが、そのなかに、「文久二年御目見の分」として「中嶋藤七郎／鏡師／両国村松町／一二〇坪」、「御目見なき分」として「村田長兵衛／

鏡師／「跡職年次」安政二年／大伝馬町二丁目住宅、そして「部屋住見習の分」として「中嶋為三郎（藤七郎倅）／「見習年次」文久二年」が記載されている。「部屋住見習」とは、まだ家督を継いでいない嫡男が、この場合には、細工所の見習に召し出されている状態で、為三郎はいずれ家督を継ぐべき身分であることを示している。

これまでに判明した中嶋家の情報（太字）を、推測を加えて、「御規式書留」文久二年「一八六二」分に記された中嶋藤七郎の家例にマッピングし、中嶋家年表としたものが左の表である⁽²⁾。

初代 中嶋伊勢

寛永一一年「一六三四」／一四年「一六三七」《天下一中嶋伊勢守藤原種定》（「鏡師名寄」）

寛永一六年「一六三九」《蓬萊文柄付白銅鏡・銘・天下一中嶋伊勢守》

延宝九年「一六八一」御用被仰付

元禄三年「一六九〇」鏡師 神田乗物町／尾張町二丁目（「江戸惣鹿子名所大全」）

元禄五年「一六九二」江戸ニテ鏡師 神田乗物町／尾張町二丁目（「万買物調方記」）

元禄一〇年「一六九七」御鏡屋 神田乗物丁（「日本国花万葉記」）

二代 中嶋伊勢

元禄一四年「一七〇二」跡職相続

元禄一六年「一七〇三」本所松坂町に屋敷拝領（「町方書上」）

享保七年「一七二二」鏡献上（「御規式書留」）

三代 中嶋？

元文四年「一七三九」跡職相続

四代 中嶋富之助

享和三年〔一八〇三〕 跡職相統

文化五年〔一八〇八〕 年始御目見願

五代 中嶋？

文化一三年〔一八一六〕 跡職相統

六代 中嶋？

文政三年〔一八二〇〕 跡職相統

文政七年〔一八二四〕 年始御目見願 済

七代 中嶋？

八代 中嶋甚兵衛

文政一一年〔一八二八〕 拝領町屋敷之儀（町方書上）

九代 中嶋又左衛門

天保二年〔一八三一〕 跡職相統

天保四年〔一八三三〕 年始御目見願 済

安政三年〔一八五六〕 拝領町屋敷調査（諸屋敷帳）

十代 中嶋藤七郎

万延元年〔一八六〇〕 跡職相統

文久元年〔一八六一〕 年始御目見願 済

文久二年〔一八六二〕 御目見の者（御細工所御職人分限帳）

慶応三年「一八六七」五節句八朔歳暮御目見願

十一代（予定） 中嶋為三郎

文久二年「一八六二」部屋住見習（御細工所御職人分限帳）

三代目の中嶋氏が、北斎の実父／養父／叔父で、四代目の中嶋富之助が、北斎の長男である。それにしても、三代中嶋氏が御鏡師を勤めていた期間が六三年というのは異様に長い。元文四年「一七三九」に跡職を相続した時の年齢を、仮に一五歳とすると、富之助に家督を譲った年齢は七八歳で、北斎自身が八九年の生涯であったことを考えると、自然ではないとしても、長命である。しかも、北斎の実父が二代目の息子（三代目の兄）だとすると、いったい中嶋家では何が起こっていたのであろうか。残念ながら、この史料だけでは分らない。ただ、北斎が中嶋家の家督を相続したことはなく、北斎の実子が御鏡師となったことだけは確かなことなのである。

註

- (1) 飯島虚心『葛飾北斎伝』（鈴木重三校注、岩波文庫、一九九九年、三一頁）、由良哲次編『総校日本浮世絵類考』（画文堂、一九七九年、一四二頁）、『燕石十種』第二卷（中央公論社、一九七九年、九一頁）参照。野口米次郎『葛飾北斎』（誠文堂、一九三二年）、織田一磨『北斎』（東京創元社、一九五七年）なども、中嶋伊勢を北斎の実父とする。
- (2) 林美一「北斎の父は中嶋伊勢」（『浮世絵芸術』一七号、一九六八年）によれば、近藤市太郎、高橋誠一郎、鈴木重三、植崎宗重氏が川村説をとる。
- (3) 林美一『艷本研究・北斎』（有光書房、一九六八年）、安田剛蔵「北斎と中嶋伊勢…北斎出生の秘密」（『浮世絵芸術』一〇号、一九六五年）など参照。なお、北斎の実父を中嶋伊勢の兄とするのは、馬琴が「叔父」と「伯父」を厳密に書き分ける人であり、養子になった時期を二十七〜九才とするのは、馬琴による「壮年」の用例を調査した結果である。また、馬琴の朱書については、柴田光彦・神田正行編『馬琴書翰集成』第六卷（八木書店、二〇〇三年、二七三頁）参照。

- (4) 安田剛蔵「北斎と中嶋伊勢・北斎出生の秘密」(前出) 参照。なお、藤實久美子「書物師」(『芸能・文化の世界』シリーズ「近世の身分的周縁」二、吉川弘文館、二〇〇〇年)、北村陽子「公儀御用鉄砲師と幕末…駄家を例として」(『歴史科学協議会編『歴史評論』第五四七号、校倉書房、一九九五年)、小野信二「御用達石山家について」(『日本歴史学会編『日本歴史』第三三一号、吉川弘文館、一九七五年)、小野信二「幕府御用達の研究」(『拓殖大学論集』第一三九号、一九八二年)、石山乾二「江戸末期における町人の信仰の一面…特に一御用達とその信仰の実態」(『武蔵大学論集』開学一〇周年記念論文集、一九五九年)、堤州夫「御用達職人の存在形態…御印判師佐々木家をめぐって」(『地方史研究協議会編『地方史研究』第四八号、一九九八年)など参照。
- (5) 『人倫訓蒙図彙』六(元禄三年「一六九〇」刊、東洋文庫五一九、一九九〇年、一九九頁)の「鏡師」参照。
- (6) 広瀬都巽『和鏡の研究』(角川書店、一九七四年)参照。なお、同書には、「天下一中嶋伊勢守」を除く三件が記載され、種定については「江戸住 寛永年間作品がしばしばある」と記されている。また、『鏡銘寄集』については、香取秀真『日本鑄工史』(郷土研究社、一九三四年)参照。
- (7) 中野正樹『和鏡』(日本の美術一〇・一一、至文堂、一九六九年)参照。なお、「天下」の表記を元に戻した。
- (8) 同前、一一〇頁
- (9) 間瀬久美子「近世の民衆と天皇…職人受領と偽文書・由緒書」藤井駿先生喜寿記念会編『岡山の歴史と文化』福武書店、一九八三年、二四二頁
- (10) 『諸職受領調』未刊文芸資料第二期九、古典文庫、一九五二年、四二頁
- (11) 花咲一男編『諸国買物調方記』渡辺書店、一九七二年、四一頁
- (12) 『徳川禁令考』第二章(石井良助編『徳川禁令考』前集第二、創文社、一九五九年、二七一・二七二頁)参照。なお、林英夫『秤座』(日本歴史叢書、吉川弘文館、一九七三年、一八〇頁)参照。
- (13) 狩野派の御絵師については、武田庸二郎他編『近世御用絵師の史的研究』(思文閣出版、二〇〇八年)など参照。
- (14) 北原進「御用達」(『江戸学事典』弘文堂、一九九四年、二一八～二二二頁)など参照。
- (15) 深井雅海・藤實久美子編『江戸幕府役職武鑑編年集成』全三六卷(東洋書林、一九九六年)を利用した。
- (16) 古文書の読解については、神谷勝広先生(同志社大学文学部国文学科)のご助力を賜った。記して感謝する。
- (17) 国立国会図書館。なお、安田剛蔵「北斎と中嶋伊勢」(前出、二八頁)が紹介する「変遷図譜元禄十七申年之形」の記述とほぼ

一致する。

(18) 福井保 『諸向地面取調書』 解題（史籍研究会編『諸向地面取調書（二）』内閣文庫所藏史籍叢刊第一五卷、汲古書院、一九八二年、九二二頁）参照。

(19) ただし、享保四年には、拝領屋敷を他人に貸すことが禁止されている。『撰要類集』六「居屋敷抱屋敷之部」（『撰要類集』第三、続群書類従完成会、一九七九年、二二二・二三三頁）参照。

(20) 註(4)参照。

(21) 藤原種定を初代・中嶋伊勢に比定すると、初代が活躍していた期間は六〇年以上となるが、ひとつの問題提起として、このような位置付けを与えた。「伊勢守」を受領した時期など、さらなる調査が必要である。